

シーボルトの臨床医学

——『蘭方口伝（シーボルト験方録）』の検討

中村 昭

日本医史学雑誌第四十一巻第一号
平成七年三月二十日発行

平成六年二月二日受付

はじめに

——シーボルトの来日と日本における医学伝習

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは一七九六年にドイツのウエルツブルグで医学者の家系に生を享け、一八二〇年にウエルツブルグ大学医学部を卒業して、内科・外科・産科学士の学位を得た。そして一八二二年にオランダの軍医少佐として採用され、蘭領東インド（ジャワ）を経て一八二三年（文政六年）に長崎出島の蘭館医師として着任した。^{（下）}オランダはこの頃貿易相手国である日本をさらに詳しく調査するために、博物学の素養のあるシーボルトに医師としての仕事の他に日本研究を委嘱したといわれる。若いシーボルトは東洋の未知の国日本の研究に大いに意欲を燃やし、学問的野心を持って来日した。日本で診療をしたり日本人に医学を教えたりすることはあまり重要視していなかったと思われるが、自らの調査に便宜を得る為の方便として診療をしたり医学教育をしたりしているうちに、日本の蘭学書生の熱意に引きこまれて日本の蘭学に大きな影響を与えることになった。

シーボルトは長崎に来て早々に出島の蘭館の中で何人かの日本人に医学の講義を始めたと叔父への手紙に書いている⁽²⁾。どの程度まとまった講義をしたかは不明だが、中西はいくつかのシーボルトの口授伝書といわれるものの内容を紹介している。それによると、大むね古い体液説とその頃の比較的新しい線維説を折衷した病理思想に基づいていたようである。このことはまた後に触れる。

来日した翌年には長崎奉行所の特別のはからいで長崎郊外の鳴滝に別荘を持つことを許され、週一回程度ここへ行つて、動植物の調査や診療を行い、またそれに伴つて日本人門人への実地教育を行った。これが鳴滝塾といわれたものであるが、シーボルトは常にここにいたわけではないから、シーボルトの高弟が塾頭(初代美馬順三)となつて取りしきつていた。塾頭格の者ももうかなり蘭学者としてでき上つていた人である⁽⁴⁾。それでなければシーボルトの教育もなし得なかつたであろう。

ここで門人がシーボルトから聞いたことを中心として記録したものが「シーボルト処方録」とか「シーボルト驗方録」とかという題名でまとめられそして筆写されたが、その内容は筆録した人またはその時期によつて少しずつ違いがあり、一定のものではなかつたようである。

シーボルトの医療内容を示すもので江戸時代に出版された唯一のものは、文政九年にシーボルトが江戸参府をした時に門人高良斎に託して作らせた『薬品応手録』⁽⁵⁾である。これはその頃入手可能な洋薬を分類して示した簡単なものであるが、シーボルトはこれらの薬を日本に宣伝して売りこむ目的でこの手引を作つたと『江戸参府紀行』⁽⁶⁾に書いている。

シーボルトは一八二八年(文政十一年)秋に任期満ちて日本を離れる準備をしていた時に、長崎地方を台風が襲い船が坐礁して出帆不能となつた。そうしているうちに、かねてから彼の行動に不審を抱いていた幕府の探索の手が延びて、彼が日本地図その他諸々の禁制品を集めていたことが発覚してしまつた。シーボルトはそのためにさらに一年間日本に拘束され、日本人の関係者とともに厳しい詮議を受けたが、結果的には彼は「日本御構(追放)」という比較的寛大な

処分となった。

この処分は幕末の開国後には取り消されたのであるが、それまではシーボルトは日本では罪人と考えられていたのであり、また蘭学が弾圧されたこともあって、シーボルトに学んだ日本人達も大威張りでシーボルトの門人であるといった、学んだことを出版するのは困難な環境にあった。

シーボルトの処方録の類の全文が印刷されたのは、門人の戸塚静海の筆録になる『シーボルト処方録』⁽¹⁾が戸塚武比古によって本誌に紹介されたのが最初と思われる。次いで筆者によって『蘭方口伝(シーボルト驗方録)』⁽²⁾が同じく本誌に紹介された。これは筆録者不明である。

本稿はこの『蘭方口伝(シーボルト驗方録)』を中心として『シーボルト処方録』及びその他の資料も参考にしながら、今まであまり検討されることがなかったシーボルトの臨床医学の実態をできるだけ明らかにしようとする試みである。

『蘭方口伝』はその全容を本誌に発表したもので、それを見て頂けばその構成はわかるわけであるが、ここに概要を説明しておく。

この内容は大きく三つの部分に分かれている。第一の部分は「四則之辨」という文章から始まって、主として治療の原則と治療薬の分類を述べている。以後これを第一部ということにする。第二の部分は「失勃児杜驗方録」という見出しで、下に「和蘭紀元千八百二十三年ヨリ二十七年迄、本邦文政六年ヨリ十年迄ニ当ル」と割注をつけ、以下百九十七条の処方または治験例を順不同に列挙したものであり、これがこの『蘭方口伝』の主要部分である。以後これを「驗方録」と略記する。第三の部分は「附諸説記聞」という見出しで、蘭方医学に関する雑録が少しあるが、これは本論文では取り上げない。

以上の内容を、一、治療の原則と治療薬の分類、二、主な疾患の治療、三、主な治療法の三つの節に分けて検討を加えて行く。

一 治療の原則と治療薬の分類

(一) 四則之辨

これは漢文で医学及び医療の基本的な考え方を述べた文章である。シーボルトはもちろんオランダ語で教えたのだから、漢文の素養のある門人が漢文で要約したものである。これを書き下し文にすると次の通りである。

四則ノ辨

ソレ医ハ自然ノ臣僕ナリ。病ハ自然ノ變動ナリ。イヤシクモ身体邪毒アレバ、變動乃チ発シテ以テソノ害ヲ擯斥ス。コレ自然ノ勢ナリ。ソノ勢ヲ推シ、ソノ機ヲ察シ、而シテコレヲ左右スルヲ上工名医ト謂ウ。モシソレ邪毒身体ヲ冒セバ變動ヲ発スル能ワザルナリ。イヤシクモ變動ナクンバ則チ名工モ術ヲ施ス地ナシ。神仙モ藥ヲ与ウル所ナシ。蓋シ四則ハ邪ヲ駆逐スル常路、処方ノ門戸ナリ。凡ソ百疾ソノ症多端ト雖モ、コノ常路ヨリ出デザルモノナシ。医コレニヨツテ病機ヲ察シ、コレヲ推シテ方劑ヲ処ス。庶幾ハ大綱ヲ失ワザランカ。コレ我が師
先生ノ秘訣、探クコレヲ蘭室ニ蔵シテ容易ニ人ニ許サズ。今吾子志ノ厚キヲ見テコレヲ濫ムニ忍ビズ、謹シンデコレヲ子ニ授ク。ソレコレヲ忽ニスル勿レ。

この文章の中で我が師の後が空白になっているのは、前にも述べたようにシーボルトが罪人になったためにその名前を出すことを憚ったのであろう。しかしここに述べられている考えは、医は「自然良能」を助けるものであるというところで、ヒポクラテス以来の医学思想であり、近世ではまたかのブルーハーヴェによって宣揚された考え方であつて、シーボルト独自のものではない。

シーボルト以前の蘭方医学の書でも、例えばオランダのゴルテルの原著を宇田川玄隨が訳し、養嗣子の玄真が補訂し

た『増補内科撰要』⁽¹⁰⁾の熱病篇にも次のような文章がある。

其二ハ唯自然良能ノ常道ニ随テ其運行ヲ順調スルノ法ナリ。夫レ生氣ノ運行其毒ヲ駆除スルノ宜ニ適シテ太過不及ノ偏ナキ時ハ能ク其熱毒ヲ制服シテ驅除スル事是レ自然良能ノ常道ニシテ更ニ他力ヲ假ラザル所ナリ。然ルニ若シ其運行或ハ太過或ハ不及ナル事アル時ハ其ノ自然ノ力此熱毒ヲ制服驅除スル事能ハズ。是ニ於テ其弱ニシテ不及ナル者ハ是ヲ増益シ、其強ニシテ太過ナル者ハ是ヲ減損シテ其自然ヲ助テ度ニ中ラシメ、以テ其疾ニ勝シムルナリ。

これはわかりやすい文章であり、前の「四則之辨」の説明になる。また次に出て来る「二性」の説明ともなる。

また京都の蘭方医である小森桃鳩は自分で蘭方医学を消化した結果を『病因精義』として、文政十年ちようどシーボルトが日本にいた時に刊行しているが、その原病編の中でこれと同様な考え方を述べ「医ハ自然良能ノ臣僕ナリ」といつている。⁽¹¹⁾シーボルトも桃鳩の学識を高く評価し、文政九年の江戸参府の折にはその往路でも復路でも京都で桃鳩と面会し、彼を mein Freund といつてゐる。⁽¹²⁾

(2) 二性と四則

次に記されている二性と四則は漢方の陰陽虚実寒熱表裏の考え方に似ている。日本の蘭学者に漢方の素養があつたためにこういう書き方になつたということもあるだろうが、西洋にもそういう考え方があつたのである。一八世紀に現れた緊張学説(線維学説)は二つの相対する力の平衡ということを唱えていたし、一九世紀初期のロマン派医学も、陰陽の対極によつて生理や病理を説明する漢方医学のような観点を持つていた。⁽¹³⁾

二性 寒(不及)熱(太過)也

○千病百症と雖モ此二ツヲ出ズ、比レ病ノ大段落、脉ハ遲数^サノ外ナシ、浮沈ハ取ルベカラズ

○遅ハ不及ニシテ寒ナリ、数ハ太過ニシテ熱ナリ

○数ト雖モ力ナキハ虚ニシテ寒ナリ、遅ト雖モ緊洪ナルハ太過ニシテ熱ナリ、刺絡清涼ヲ行フベシ

ここで数サツといっているのは漢方用語で頻脈のことである。要約すれば、脈診で大切なことは遅速と力(現今の血圧に相当)であつて、漢方でいう脈の浮沈は取るべきでないとしている。

四則

焮腫 衰弱 皮表 第一道胃腸也

焮腫は炎症であるから熱であり、また積極的な反応であるから漢方でいう実に当るであろう。衰弱は寒であり、虚である。皮表はもちろん表であり、第一道胃腸は裏である。

(3) 六法と十八道薬剤

六法

漏泄 分解 清涼 収酸 強壯 緩牽

これは治療法をこのように大きく六種のカテゴリーに分けたものである。このうち前の四種は体液病理学説によるものであり、後の二種は線維学説によるものと思われる。シーボルトが医学を学んだのはドイツのロマン派医学の時代であるが、現実の治療はこのような折衷的な考えによつていたと思われる。さらに外科的な疾患に対しては固体病理的な考えを加味したであろう。

次にこの六法に相当する薬剤を分類して合計十八道薬剤とし、それぞれに属する洋薬に漢薬を少し混えて多数列举している。しかしこれらの洋薬は必ずしも当時の日本で入手できたものではない。それで別の項ではシーボルトの常用薬

というものの二十九種を示しているが、その中には漢薬もかなり含まれている。シーボルトは漢蘭折衷であったという見方も可能である。

具体的薬物名は原資料を参照してもらふこととし、ここでは六法に基づく薬剤の分類だけを紹介しておく。

漏泄ハ吐下、利尿、発汗、殺虫、驅風、吐痰是也

分解ハ通経、破石、驅風、吐痰是也

清涼ハ諸清涼劑、刺絡、下劑、吐劑是也

収酸ハ収酸是也

強壯ハ強腦、健胃、収斂、止腐是也

緩拳ハ甘和、鎮瘡是也

なおこれより後、幕末の蘭学者である広瀬元恭は『三才雜辨』という著書で、二性、四則、六法、十八道薬剤の考え方を述べている。⁽¹⁴⁾ おそらくシーボルトの口伝の系統を引いたものであろう。

二 主な疾患の治療

初めに述べたように、シーボルトはウエルツブルグ大学医学部卒業に際して内科、外科、産科の学位を獲得した。その他に眼科も得意だったといわれる。シーボルトが日本へ来たのは卒業してから三年しか経っていないのであるが、彼はその頃のヨーロッパの多種類の医学教育コースの中で最高の課程を経たのであり、⁽¹⁵⁾ 当時の西洋の最新医学をわが国へ伝えた意義は大きい。

唯一人の西洋人医師として日本へ赴任したのであるから、当然全科を診療しなければならず、それによって日本人医

師に対して一人で全科の医学教育をする結果となった。これは幕末のポンペでも同じであるが、ポンペは最初から系統的な教育を目的として来日した点が異なる。

ここに取り上げる「驗方録」は順序不同の記録であるが、ほとんど全科にわたっている。これを現代医学の立場から主な疾患別に整理し、実例を引用して検討する。資料の引用に当っては、異体字、送り仮名等は読みやすく改変した。頭につけた()内の漢数字は「驗方録」の条項の番号である。

(1) 悪性腫瘍の治療

この「驗方録」で悪性腫瘍と思われるものは八例ある。この頃は十八世紀のモルガーニの病理解剖学より後の時代であるから、当然悪性腫瘍という觀念はあつた。八例のうち癌という字は三例で使っているが、ここで引用するのは次のように鰕瘍カンケルと舌疽である。その他、次の婦人科の項で引用する子宮頑腫というものもある。

(三六) 鰕瘍カンケル截断ノ前鬪花スル時ノ方

吉納キナ 大黃 硝石 甘草 薄荷メンホ カノコソウ

右水煎 右外用

ムートルコロイド苦薏

右单味水煎患処ヲ洗フ

大黃 龍胆 硝石

右三味内服

鰕瘍カンケルと記しているが、どこの癌とはいっていない。癌が外表に鬪花した場合に、洗滌、鎮静等の前処置をして截断する手順を述べ、その後の疼痛に対しては内服薬を処方している。なお、コロイド Kolloid というのはオランダ語で生葉の

ことである。

次に舌疽の例をあげる。

(二二) 舌疽初発、其ノ頑肉ヲ切去り、後顎下人迎ノ辺ニ梅核ノ如キ物ヲ生ジ、強ク之ヲ押セバ其ノ痛舌根ニ牽引ス、否レバ痛マズ、漸次ニ大ナラント欲スル者(処方略)

これは舌癌手術後のリンパ節転移について述べている。またその後疼痛が激しい時はラウダニウムという阿片チンキ剤を処方している。

(2) 婦人科疾患の治療

産科婦人科に属する疾患も十二項と多い。そのうちの二つを引用する。

(四四) 老婦当肝脾部頑硬 シイボルト云子宮頰腫

アッサフォーチダ阿魏_{二錢} カノコソウ ヒヨシヤモス五分 甘草膏_{四錢}

右二百六十九丸トシ毎日十五丸ヲ服ス

これは子宮癌が肝臓などに転移したものである。当然姑息的な治療しかない。アッサフォーチダ *Asatocetida* は漢名が阿魏で、十八道薬剤では通経剤に入っている。またヒヨシヤモス *Hioscyamus* はナス科の植物で有効成分がヒオスチアミンで、阿片とともに麻痺剤に入っている。

また次の項も子宮癌のようであるが、帯下のひどいケースである。

(九七) 婦人白帯下変ジテ赤帯下トナリ陰門焮衝尿時ニ当リ痛キ者

蜀葵煎汁_{適宜} 硝石_{二錢} ズワフルシユール硫黄精_{六滴}

左合毎時二七

蜀葵は緩和剤、ズワフルシユールは硫酸で止腐剤となっている。なお、七という字は匙と同じで、一七は約四々〓四
匁である。

(3) 徽毒の治療

徽毒は十六世紀大航海時代に世界中に広がり、江戸時代の日本でも非常に蔓延していた。⁽¹⁶⁾ 現代では梅毒と書いている
が、江戸時代では大体徽毒と書いていたのでそれに従う。「驗方録」では徽毒に関する項は十六と多いが、そのうちの少
しを引用する。

(一) 徽毒ニテ臂ノ辺経久腫瘍

硝石二錢 シルパソウダ^{四錢}
代用芒硝

右水九十六錢ニ溶解シ薄荷油四滴ヲ加ヘ毎時二七

又其ノ外用法

カヤブーテ油二十錢 礪砂二錢 胆ハ油二錢

右混和毎日患部ニ擦ス

これは徽毒の第三期で骨にゴム腫ができたものと思われる。シルパソウダ Sulfat Soda は硫酸ナトリウムで芒硝と同
じである。硝石も芒硝も下剤として用いている。即ち毒を下すという考え方で、古代から洋の東西に共通の医学思想で
ある。

右の処方では水銀剤を使っていないが、この頃徽毒に対して水銀剤はヨーロッパでも中国でも日本でも主要な薬の一
つであった。日本では主として軽粉等の形で内服され、それも瞑眩するまで服むという考え方があって、水銀剤中毒が

多かつた。シーボルトはそれに心を痛めていたが、彼も頑固難治の黴毒には水銀軟膏の塗擦療法をすすめており、二十七日間で一クールとなる治療法を述べている。その一部分を紹介する。

(一一五) 經久黴毒頑固難治者

初日下劑ヲ用ユ其ノ方

芒硝八錢 紫茉莉根一分六厘強

右水十二オンスニ煮テ毎時一茶碗ヲ用ユ

二日 早朝温湯ニ浴シ夜モ又温湯ニ浴シ而シテ前方ノ下劑ヲ用ユ、但シ入湯後服スベシ、入湯中ハ服スルコト勿レ

三日 ケレイスマルキュルサルフ(灰色水銀軟膏)ニ錢ヲ取り足ノ先ヨリ膝ニ至ルマデ摩擦スベシ

四日 前日ノ儘ニシテ何モ用ヒズシテ置クベシ

五日 早晨前コノ膏一錢ヲ取り膝ヨリ腰ニ至ルマデ摩擦スベシ

(中略)

廿七日 温湯ニ浴シ、石鹼及火酒ヲ以テ洗ヒ而シテ新衣ニ換ヘ清涼ノ居室ニ移スベシ

これは水銀療法と下劑療法と温浴療法の併用である。

またシーボルトと同時代人で且つ学問的にも近いフリーフェランドの *Enchiridion Medicum* を緒方洪庵が訳した『扶氏經驗遺訓』⁽¹⁸⁾を見ると、黴毒の項に吐涎療法として水銀軟膏療法を述べている。涎から毒が排出されると考えたようである。黴毒治療の諸法のうちで最も有効だが最も峻劇であると注している。施行法の概略は次の通りである。

吐涎療法ニハ規吉撒爾弗(水銀軟膏)ヲ用フ、毎日一二錢宛体表諸部位地ヲ易ヘテ之ヲ擦シ、兼テ微温浴ヲ行ヒ、攝養ヲ敵ニシ、或ハ断食法ヲ命ジ、以テ吐涎ヲ発スルニ至ルベシ

二十世紀の中頃にペニシリンが利用可能になるまで水銀劑療法は行われていた。

(4) 泌尿器疾患の治療

泌尿器疾患は七項あり、そのうち四項は淋疾である。淋疾は古くから黴毒と混同されており、フランスのリコール (Ricord) が一八三七年に淋病黴毒異毒説を発表してから漸く別疾患と認められるようになったといわれる。⁽¹⁹⁾ これはシーボルトの来日よりも後であるが、「驗方録」を見るとシーボルトは黴毒と淋病を一応別疾患としていたようである。淋疾の一例を引用する。

(四〇) 淋家脚膝酸疼シ眩暈スル者

大黃五分 カノコソウ二錢 吐根一スクリュベル

右水九十六錢 ニテ煎ジ甘硝石精五分 加へ朝夕一匕ヲ服ス

大黃は下劑、吐根は吐劑で、いずれにせよ毒を排泄させようという治療である。カノコソウは漢名纈草でバレリアン酸を含み鎮静作用がある。

次に陰囊腫脹の治療法と病理についてやや詳しく述べている項があり、その全文を引用する。

(一〇二) 陰囊水療法

トロイカルヲ挿テ陰囊ヨリ水液ヲ漏出シ其跡ニ唧筒^{ポンプ}ヲ以テ漏レタル液ノ量ダケ赤葡萄酒水各半ヲ射入シ其口ニ乾撒糸ヲ充ツ、此ノ如ク毎日前ノ如ク相施スベシ又内服方 硝石一味溶化劑

若シ搖擲ヲ発ル時ハ腹部ニ縛帶ヲ施スト云、シイボルト云ク陰囊腫ニ三腫ノ起原アリ、一ハ水ヨリスル者、二ハ頑硬ヨリ為ス者、三ハ腹膜破裂ヨリナス者也、腹膜破裂ハ之ヲ収ル時暫ク旧ニ復スト雖モ從テ下垂ス、食後其ノ膨脹スルヲ覺フ是其ノ徴也

この項の前半で述べているのは陰囊水腫を赤葡萄酒で処置する方法であるが、この頃の日本ではまだ葡萄酒は作っておらず、小森桃場の『蘭方枢機』(ブカン Bucchan 原著)では葡萄酒は焼酒で代用と書いてある。後半では陰囊の腫脹には水腫と腫瘍と脱腸があるということを述べている。

(5) 眼疾患の治療

眼科もシーボルトが得意だったといわれるものであるが、「驗方録」一九七項のうち二四項が眼科疾患であるからかなり多い。その中には次のように散瞳剤に言及して注目すべきものがある。

(一〇五) 内障瞳孔散大ノ者

ヒヨシヤモス十五ケレイン ジキターリス十ケレイン 甘草少

右三味丸ト為シ三日用ヒ尽ス

凡ソ亜鉛華及ジキターリスヲ点ズル時ハ瞳ヲシテ広濶ナラシメ烏頭煎ヲ点ズル時ハ瞳子ヲシテ縮少セシムルナリ

膿満眼ノ証、上面綠色ヲ帯モノハ微毒ヨリ来ル兆ナリ、眼目ノ焮痛軟和ニスルハ獸糞ノ骨髓ヲ点ズルコトアリ

針術前ニ瞳子ヲ開カセ広メン為ニヒルセンコロイト并ニシキフタ及阿片汁ヲ眼内ニ点ズ、ヒルセンコロイド代用莨若、和蘭甚ダ多シ、種ヲ下セバ生育スト云

ヒルセンコロイド *Bizenkruid* はヒヨシヤモスと同じである。ナス科の植物であり、これを莨若で代用するというわけであるが、わが国で莨若というのはハシドリコロ *Scopolia Japonica* である。莨若に関しては、シーボルトが商館長ステュルレルとともに江戸に上った時に將軍家の侍医の土生玄碩が拝領の葵の紋服を贈ったりしてシーボルトから聞き出そうとしたわけであるが、長崎では門下生にこのように教えていたのである。土生玄碩は葵の紋服の件が後に発覚し、いわゆるシーボルト事件に連坐し厳罰に処せられた。

眼科の処方例をあと一つあげておく。

(四七) 角膜ノ白膜ヲ去ル方

蘆薈六ケレイン 孟朶二ケレイン ラウタニユム^{十滴}
若ナキ時ハ阿片二厘

右蜀葵煎汁一六錢 中ニ和シ翳上ニ点ズル事二三次

又方 亜鉛華少許

右ヘット獸脂ニ和シ点ズルモ可也

かなり微細なことをいつているのに注意する必要がある。これは点眼薬と眼軟膏の処方である。

シーボルトの高弟の高良齋は特にシーボルトに親炙して眼科を専攻し得意としたが、シーボルト離日後出版しようとした著書はシーボルトの名前が出ている故に発禁とされたという。⁽²¹⁾ このようなことによつてシーボルト伝授の医学の普及が妨げられたことは想像以上のものがあつたであらう。

(6) 皮膚疾患の治療

皮膚病はいつの時代でも多いが、この「驗方録」では黴毒は別としてそれ以外の皮膚疾患が二十三項ある。その中で「痘瘡治方大要」として痘瘡の分類と治療法についてやや詳しく述べたものを部分的に紹介する。

(一一四)

第一 區別

真痘 假痘 水痘 稀痘

第二、発時局

初発 起脹 灌膿 結痂

第三 痘性質

善痘 焮腫熱痘 神經熱痘 腐敗熱痘

各四時ニ從テ藥品ノ區別アリ、四時ハ發時局ナリ

善痘ハ藥ヲ用ルニ及バズ

焮腫熱痘ハ清涼下劑即チ答末林度滿那カロメルノ類ナリ、而シテ發汗劑ヲ兼用スベシ、即チ吐酒石金硫黃礪砂等ナリ

(後略)

即ちこれは痘の類別と痘瘡の正常な経過と異常な経過を記し、経過が順調の場合は特別治療する必要はなく、炎症が悪化して焮腫熱、神經熱、さらに腐敗熱等の性質を帯びた時の治療法を述べている。

痘瘡はもちろんこの頃非常に多かつたが、十八世紀末にジェンナーによつて發表された種痘法がヨーロッパではもう普及していた。シーボルトは痘苗を日本に持つて来て種痘を試みたが、痘苗が変質していて成功しなかつた。わが国で種痘が普及するのはこれより約三十年後、幕末になつてからである。中でもシーボルトの門下であつた伊東玄朴、戸塚静海等の努力によつて江戸に種痘所が創立されたのはよく知られていることである。

もう一つの小兒濕疹の例を引いておく。

(一七四) 小兒小瘡ヲ癢シ酸痒スルモノ 蝟蝨石二十ケレイン 硫黃三十ケレイン サツサフラス四錢 龍腦十ケレイン 沙糖
八錢

右分二十服ト為シ日二服

外用 海水浴

蠅蛄（おつこ）はオクリカンキリとも呼ばれ、ザリガニの腹中にできる結石である。十八道薬剤では吸酸剤に分類されている。サッサfras *Sassaras* は十八道薬剤に入っていないが、ヒル（22）によればアメリカ原産の木で、その樹皮が発汗剤として使われる。また海水浴が治療手段とされているが、現在でもドイツではそういう考え方をとっている。（23）

(7) 肺疾患の治療

肺疾患と目されるものは咳嗽というようなものも含めて十八項ある。喘息、胸水、百日咳といった病名も出ている。胸水の診断の根拠ははっきりしないが、打診をしたのであろうか。後で腹水も出て来るが、これもやはり打診をしたのであろう。肺労（肺結核）という病名は現れていないが、消耗熱という病名があり、これは戸塚静海筆「処方録」では労瘵となっているので、これらは同じもので肺結核だったのだらうと思われる。

ここでは感冒から肺炎になったと思われる症例、しかもその患者がシーボルトの高弟の高良齋であるという興味ある条項を全文引用する。戸塚氏「処方録」では「友人高良齋が感冒に罹った」という短い条項が別にあつて、本項では良齋の名前は消えてしまっているが、これに肺焮腫（肺炎）という題がつけられている。

(一二〇) 同じク脉急数胸膈刺痛横臥シ難ク、呼吸促迫大渴煩躁四肢搖擲、食気減少小水赤黄大便常ノ如シ 高良齋ヲ療スル法

第一 放血九十莖 其後即薬方ハ

硝石二莖 甘草膏五分 ヒヨシヤムス十二ケレイン

右水九十六莖 ニ溶化シ温ニ乗シサーリツ代ヲサギソツ 娥眉草根ニヒ ヲ加ヘヨク和シ毎半時二七ヲ用ユ 毎夜一次灌腸ヲ施ス其方

醋半碗 苦意煎汁 石鹼一莖或半莖

右溶化シ用ユ

此クノ如クスル事八日諸証猶減ゼズ、但漸ク仰臥ヲ得ルニ至ルノミ、又八日ニ放血^{三十}ヲ漏シ煎劑前方ヲ用フ
然ルニ九日ヨリ胸痛十二七八ヲ減少ス、脉大緩ニシテ弱ナリ。四肢搖擗肉潤大渴煩躁大ニ減少ス、故ニ灌腸法ヲ止
メ尚前方ノ飲劑ヲ用ユ、十二日ニ至リ諸症半ヲ減シ少ク横臥ヲ得ルニ至ル。然レドモ飲食進マザルコト先ノ如シ、
背ニ発泡ヲ施ス大サ碗ノ如シ、後方用ユ

カROMEIL 二十ケレイン 金硫黄 二ケレイン 龍腦十ケレイン ジキターリス
右合十服ト為シ日三服

此ノ方十三日ヨリ廿九日迄連進ス、然ルニ自汗頻ニ出テ諸症八日減シテ漸ク快ヲ得ルト雖モ食氣復シ難シ、由テ後
方ヲ用ユ

エイスラントモス^四莖

右水^{九十六}莖 二煮テサーレップ一莖 ヒヨシヤムス一スクリユベル オキシメルエルキシリヲ加ヘ毎半時服一七〇後エキス
タラクトケンチアナヲ加フ

これは肺炎に対して当時の蘭方による模範的な治療だったのだと思われる。要するに炎症をどのように押さえ、その
後体力をどのように回復させるかということであるが、炎症に対しては放血(瀉血)と下剤と灌腸法を行っている。瀉血
と下剤療法については後の治療法の項でまた触れることにする。

一方体力保持の為にサーレップ、ジギタリス等を使っている。サーレップは十八道薬剤の中に入っていないが、『新撰
洋学年表』⁽²⁴⁾の安永五年の項に長崎の通詞がオランダ人からサーレップについて聞き取った書上が載せてあるので、これ
を引用する。

サーレップ出所アメリカ洲ノ内ニ有之、五六月花咲申候、色濃紅ニシテ大体日本ノ紫蘭ニ似候由、此草実ヲ不結、

暮秋頃枯レ春ニ成リ芽ヲ出シ申候、エウローハヘルシヤ其他ニテモ相用ト、功能宜敷人參服用ノ代ニモ相成リ、凡二十ヶ年以上相用居申候

なおヒル⁽²⁵⁾によれば、サーレップ Salep は学名 *Orchis orientalis* で、その乾燥した根を用いて病後の回復に効果があり、またトルコ人はこれを強精剤として用いているとのことである。しかしこれは日本では手に入り難いので、代りにヲサギソウでも良いとされている。

とにかくこのような治療によって高良齋は快癒したわけであるが、この治療の過程においてシーボルトがどの程度関与したのか、シーボルトの名前が全く出て来ないのでわからない。戸塚静海の筆録では、難かしい症例でシーボルトの指示を受けた場合にはその旨記しているから、この良齋の治療ではシーボルトは関与しなかったものの如くである。良齋は鳴瀧塾の塾頭を勤めた時期もあったが、古賀⁽²⁶⁾によれば良齋はまた長崎市中に自分の医院を持っていたというから、この肺炎の時にはその自分の医院で友人の手によって治療されたのかも知れない。

(8) 消化器疾患の治療

消化器疾患の範囲もややあいまいであるが、ほぼそれに当ると思われるものは十六項ある。病名としては嘔吐、下痢、腹痛というようなものが多い。次に引用するのは患者の名前は記されていないが、戸塚氏の「処方録」ではシーボルトが罹患したことになっている。

(三五) 暑日停食シ、脉緩舌上微苔且微渴、腹辺臍ヲ遶リテ痛ミ微下利

マグネシア一錢 吐根十ケレイン 大黄十ケレイン 沙糖二匕

右合為八服二日服尽

停食という症状名は『扶氏經驗遺訓⁽²⁷⁾』の腸胃病編に出ており、消化不良の食物が胃中に停滞したこととして、従つて治療は下剤と吐剤の組合せである。

次に霍乱という例を引用する。

(三八) 霍乱吐瀉甚シキ者

マグネシア三錢

大黃三分五厘

沙糖一錢

ラウタニウム

薄荷^{ペールメンタ}各六滴

霍乱という病名は古くから漢方医学で用いられているが、現代医学の何を指しているのか判然としない。『扶氏⁽²⁸⁾』ではコレラの訳語を霍乱としている。山崎⁽²⁹⁾によれば、わが国へのコレラの初度の伝来は文政五年、すなわちシーボルト来日の前年であるから、シーボルトの滞在中にコレラが存在した可能性はある。鳴瀆塾の初代塾頭であつた美馬順三は文政八年にコレラで死亡したといわれる⁽³⁰⁾。

文政五年のコレラ伝来に先立つて情報をつかんだ宇田川榕庵はオランダの資料から「コレラモルビユス説」を訳出しているが、この中で治療法としては「カロメル二十グレインを末とし、阿芙蓉液六十滴、薄荷水一オンスを以て飲みしめ」などとしている。阿芙蓉とは阿片である。引用したシーボルトの処方⁽³¹⁾のラウタニウムというのも阿片チンキであるから、類似の処方といえよう。

(9) 骨・関節疾患

これに相当するものは十一項あるが、そのうち四項は黴毒または淋病に伴うものである。これらに関して既に引用したので、ここではそれ以外の例を出しておく。

(三〇) 関節屈伸妨グズ、之ヲ按セバ微痛、否レバ痛マズ、歩スレバ躓ヲナス者吐酒石五分 牛胆三錢 豕油八錢

右混和患処ニ摩擦スルコト一日ニ三次或ハ四次、海水浴ヲ毎日二三浴セシム

(一四七) 腐骨疽瘡口ヨリ濃汁出ル者

カロメル 内服

又外用方

竭^{キナ}納^ナ煎汁 黄金水^{石灰水ニ猛薬ヲ加フルモノ} 右唧筒ヲ以テ瘡孔ニ注入シ外面水銀軟膏^{クイックサルフ}ヲ擦スベシ

これですべてを尽くしたとはいえないが、シーボルトがいかに多種多様の疾患に対処していたかがわかるであろう。しかも思うような薬も器具もない状況下で全智全能を傾けていたのである。次の節でなお治療法の観点からさらに検討を加えることとする。

三 主な治療法について

十八世紀後半から十九世紀の前半にかけて基礎医学や診断学においては大きな進歩があつたが、治療法に関する進歩は僅かであつた。十九世紀の中頃にロキタンスキーの病理解剖とスコダの打聴診法によつて診断学を大成した新ウィーン学派は治療に関しては懐疑的で、治療上のニヒリズムともいわれたとい⁽³¹⁾う。

一八三六年に出たフーフエランドの *Enchiridion Medicum* は附録に「主要な三治療法」という一篇があり、杉田成卿はこれを訳して『済生三方』⁽³²⁾として刊行したが、三方とは刺絡(瀉血)と阿片と吐剤である。これらは皆古くからある治療法であるが、フーフエランドによればこの三方は時代により盛衰があり、五十年前は刺絡が勢を逞くし、次いで吐剤の世となり、またこれに次いで阿片が位に登つたが、当今はまた刺絡が盛んになっているとしている。いずれにせよこの三方をよく運用できる者が良医であるというのがフーフエランドの考えである。

また一八四五年に出たヘーゼルの『医学史』⁽³³⁾で近年の治療の進歩としてあげているのは、十七世紀に導入されたキナ皮、吐根や水銀等の金属治療剤、十八世紀から十九世紀にかけては温泉水治療法とハーネマンのホメオパシー程度である。

現代から見て奇妙に思えるのは、十八世紀末のウィザリングのジギタリスについての業績が評価されていないことである。フーフエランドもシーボルトもジギタリスは随分使っているのであるが。これら治療法の具体的な検討は以下の各項で扱う。

(1) 瀉血療法

十九世紀前半のヨーロッパの医師はどんな立場にあつたにせよ、ほとんど瀉血をしない者はなかった。このシーボルトの「驗方録」では一九七項のうち瀉血に言及しているのは五項だけなので、この時代としては少いといえるが、これは日本人がこの治療法を嫌つたためもあるかも知れない。

「驗方録」で瀉血または刺絡を指示している項目をすべて示すと次の通りである。

(一二) 喘息、脚湯刺絡其他諸治或ハ和胸方等ヲ用ヒテ無効ノ者

カロメル十二ゲレイン 阿片一ゲレイン 沙糖一オンス

(一九) 産後発狂

阿片一厘六毛ヨリ
五分ニ至ル

其他治

瀉血百二十莖 清涼劑硝石莢根甘草

(九四) 癩癩

第一 刺絡

硝石 ヒヨシヤームス カストレウム等ヲ随証用ユベシ

(一一一) 焮腫眼

刺絡○清涼劑○水蛭○脚湯

(一二〇) 前出、高良齋の肺炎

第一 放血九十 (以下略)

さて『濟生三方』⁽³⁴⁾によれば瀉血の効能は四つあるという。第一は生活活動を減殺することにより炎症性疾患の勢を弱め、第二は線維を弛緩し痙攣を緩解し、第三は多血に対して血量を減少することであり、第四は局所の血の鬱積を除くことであるという。

この考え方で行けばほとんどすべての疾患に適用できることになる。ただ病気のどの時期にどの位の量の血液をどこかの血管から抜くかということが医者 of 技倆とされた。いずれにせよ、ここであげた例で見れば、一回に三五〇グラムから四五〇グラム程を抜いているのだから大変なことである。

ここで産後癡狂と癲癇が出ているが、精神科でも瀉血は常套手段であった。この産後癡狂というのは子癇の可能性があるが、『扶氏』⁽³⁵⁾によれば子癇は脳の血液鬱積が原因であるから、予防のためにも治療のためにも瀉血が必要であるという。

蛭に血を吸わせるのもちろん血を抜いてしまおうという発想法である。また喘息と焮腫眼で刺絡とともに脚湯を指示しているが、これは脚の方に血を集めてしまおうという治療である。

(2) 阿片の使用法

これまでに引用した項でも既にいくつか阿片の使用例がある。「験方録」では合計二十二項で阿片が出て来る。ただし名称はオヒウムのこともラウダニウム（阿片チンキ）のこともある。

また『済生三方』³⁶を参考にすると、医療において阿片の使用は古来盛衰があつたが、欠くべからざる薬であつたことには変りがない。名医ガレヌス、シデナム、ホフマン、ウエルホフ等は極めてこの薬を重用した。

『済生三方』によれば阿片は血管系を興奮させる効能と神経系を抑制する効能がある。そして現代の我々から見て意外なことは曾ては阿片が興奮剤として用いられることが多かつたことである。またフーフェランドは阿片の多用または誤用によつて人を害することが多いという警告も発している。

「験方録」ではシーボルトは主として鎮痛鎮痙の目的で阿片を使つており、今までに引用した所にも出ているが、なお注目すべき項を引用する。

(二三) 舌疽ヲ切去リ痛甚キ者、海葱下剤ヲ用ヒテ而ル後左ノ含嗽剤ヲ用ユベシ
蓄薇蜜 茶煎汁一ボンド
右二味合、阿片太陽煎二十滴ヲ加フ

○若シ疼痛甚シキ時ハ「ラウタニウム」ヲ用ユベシ。或ハ舌疽ヲ切去リテ後唯硝石单味ノ溶解剤ヲ用ル事アリ。惣テ截断術ノ後之ヲ与テ以テ嗽衝ヲ防グナリ

鎮痛の目的以外には、次のように角膜の斑点などの治療に用いる点眼薬にも配合していることが多い。

(二) 白点眼又瑪瑙翳多年ノ者、焮腫消散ノ後翳膜尚在ル者

猛汞丹一ケレイン 阿片ニケレイン

右水十六棧ニ溶解シ眼中ニ点ス

(3) 吐剤の使用法

簡単に考えれば、吐剤は下剤と同じで体の中の有害なものを排除してしまおうということである。しかしフーフェラ(37)ンドによれば吐法の効能はそれだけではなく、胃腸や心肺系の神経を刺激する効果もあるという。

『蘭法口伝』第一部、十八道薬剤の吐剤の項には七種の薬があげられている。このうち古くからよく使われているのは吐酒石である。またヘーゼルが治療薬の進歩の一つと述べた吐根も含まれている。「験方録」で吐酒石は十五箇所に、吐根は七箇所に現われている。

先に消化器の項でシーボルト自身の食中毒(?)の症状の時にも吐根が使われていたが、次の例も典型的な吐根の適応例であろう。

(三七) 痙攣 酸液ヨリ粘液ニ及ビ来ル者

吐根五ケレイン カロメール十ケレイン 阿片ニケレイン 蝸蝓石二十ケレイン 沙糖

右為十二服一日三服

シーボルトの『薬品応手録』によれば、吐根十五ケレインを服すれば快吐を催し、些少用ゆれば発汗表達の効を奏すとあるから、この場合は発汗剤として使ったのだろう。発汗によつても体の中の有害なものが排泄されると考えられた。吐酒石は十八道薬剤の分類で吐剤以外に発汗剤にも入っており、実際は発汗剤として用いられたことが多いようである。『薬品応手録』では、吐酒石は四分の一ケレインから二分の一ケレインから二分の一ケレインまでは発汗及び和胸の効を奏し、二ケレインから三ケレインを用いる時は吐を促すとある。

(五八) 発汗方 痘瘡内陷ノ者

カノコソウ一錢 礪砂十二ケレイン 吐酒石半ケレイン

右先ヅ纈草(カノコソウ)ヲ煮、次ニ三味ヲ下ス

皮膚疾患の処で引用した痘瘡の治方でも、「焮腫熱痘ニハ吐酒石金硫黃礬砂等ノ発汗劑ヲ兼用スベシ」と記されている。

(4) 下劑、灌腸の使用法

下劑あるいは灌腸によつて悪いものを出してしまおうとする治療法は消化器疾患であれば当然と思われるが、それ以外の熱性疾患にも瀉血と並んでこれがしばしば行われたのが古代から近世までの医療の特色である。これはただ悪いものを排泄させようというだけではなく、発熱等の反応が強盛に過ぎるのをこれによつて鎮静化させると考えていたのである。ゴルテルの『内科撰要』⁽³⁸⁾の次の文章がよくこれを表わしているといえよう。

身体壯熱シ脉強盛ニシテ氣息急促ナルヲ以テ運行太過強盛ノ症タル事ヲ診シ得バ、宜ク刺絡シテ瀉血シ、一次ニテ効ヲ奏スルニ足ラズバ再瀉シ、又清涼ナラシムルノ吉利詞キリスチヤール參兒（灌腸）ヲ施スベシ

肺疾患の項で引用した高良齋の肺炎の治療はこの考えで行われているものである。

微毒のような病氣の治療では当然その毒を下すということを考えた。微毒の項で引用した水銀軟膏の塗擦療法の場合、軟膏の効力によつて皮膚及び涎から毒を排泄させると考えたが、同時に下劑もその間に用いている。

また結腸癌のような病氣で便が出にくい場合はもちろんこれを何とか出さないといけないから、次に引用する例のようない方もされている。

(八五) 久年腹痛且或ハ癍囊ト俗ニ号スル者

大黃五分 薄荷油五滴 マクネシヤ五分 カノコサフ一匁

右合分為二服、一日ニ服ミ尽ス

(八六) 前証痰喘ヲ兼ヌ

オンドルソート芒硝 大黃各五分

右末ニシ、日二三行ノ下利ヲ取ル、此ノ方ヲ服スル事一日、後方ヲ与フ

マクネシア五分 蝸蝓石三分 沙糖二錢

右合為三服一日服尽

癰囊という病名は『扶氏』⁽³⁹⁾の慢性食後嘔吐の症に「所謂反胃癰囊即チ是ナリ」という注があり、その記述を読むと胃癌または結腸癌を指していると思われる。

下剤は十八道薬剤でも緩下剤、強下剤、強々下剤の三類に分けて合計十六種の薬が記載されている。これらを使い分けていたわけであるが、その中には蓖麻子、大黃、センナ、燬性マグネシアなど現在でも使われているものが多い。

ここには癰囊の例だけ引用したが、「験方録」では処方の中にこれらの薬が配合されているものはこの他にも非常に多く、枚挙に暇がない。

(5) キナ皮の使用法

ヘーゼルの『医学史』ではキナ皮を治療の進歩の中に入れてある。これは十七世紀に南米ペルーからヨーロッパにもたらされたものである。吐根と同じ頃に導入されたが、キナ皮はとくにマラリアに対して特効薬として使われ、またその他の解熱の目的にも強壯の目的にも使われた。フーフェランドの *Enchiridion Medicum* でもキナは多用されている。これは一八三六年の著作であるが、一八二〇年にキナ皮から抽出されたキニーネにも言及している。

『蘭方口伝』第一部十八道薬剤でキナは健胃剤、止腐剤、強神剤の部類に入っているが、これには解熱剤という部類はない。一八二〇年代にシーボルトが来日した頃にはキニーネはもとよりキナ皮も貴重品であり、シーボルトはキナの代用として多く水楊を用いた旨『蘭方口伝』に記されている。藤井⁽⁴⁰⁾によれば、わが国では寛政六（二七九四）年に伊良子光頭が初めてキナ皮を試用したとのことである。

「驗方録」を見ると一応キナの名称で処方されているものはかなり多く、十一項ある。またその他に「キナ皮ハ哺乳ノ小兒ニハ多ク用ユル事ヲ禁ズ」という注意事項も記されているので、かなり輸入されていたのかも知れない。

シーボルトはキナをあまり解熱の目的に使つておらず、主として強壯または止腐の目的で使つてゐる。例えば癌の項で触れた舌疽に対する処方として次のようなものがある。

(二二二) 舌疽初発、其ノ頑肉ヲ切去リ、

(中略)

内服薬ノ方

シキユータ代用 眞若一匁 吉納キナ 三匁 甘草膏適宜

右甘草膏ニ水少シ許ヲ加ヘ徐々ニ煮解シ余薬ヲ投ジ丸ト為シ廿日ニ之ヲ服ス

(一四一) 舌疽

竭納キナ 二オンス

右水煎スワーフルシユール(硫酸) 二十滴ヲ加フ

又舌上ニ塗ル 胡蘿蔔汁性惡液ヲ 淨掃スル也 及没藥チンキテユル丁吉的由兒

(6) ジギタリスの使用法

ジギタリス(¹¹)(キツネノテブクロ Foxglove) はイギリスで民間薬として古くから使われていたが、一七八五年にウィザリングがこれの利尿作用についてきちんとした治験の報告を著書として出した。彼は十年間で約二百例のジギタリスの使用経験をしたのを、効いた例も効かなかつた例も薬の使用量とともに客観的に記述し、考察を加えたところに価値があつた。

シーボルトが一八二二年に日本に来た頃はジギタリスはまだ新しい薬であり、彼は『江戸参府紀行』⁶⁾の中で、ジギタリス、海葱、ヒオスなどは彼が来る以前には日本ではまだ知られていなかったと述べている。

「験方録」でジギタリスを使っている処方は二十項とかなり多い。症例は腹水とか動悸とか胸水のように今日の眼から見ても妥当なものも多いが、「神氣鬱冒上逆シ憤怒シ易キ者」というような首をかしげたくなるものもある。ジギタリスは十八道薬剤では利尿剤の類にだけ入っているが、『薬品応手録』を見ると、ジギタリスは尿を利し血を稀にす、という注がついている。すなわち、血が濃過ぎるのを薄めることによつてのぼせやすい人を治す、と考えたようである。それで一般にはジギタリスは鎮静剤として使われたことが多いといわれる。ウィザリングの原著⁴⁾では水腫に基づく精神異常や癲癇には有効であると述べている。

次にジギタリスの使用量の問題を考える。もちろんジギタリスの葉末の重量ということになるが、葉末は二十世紀の中頃まで使われていた。「験方録」に次のような項がある。

(六六) ジキターリス散

ジキターリス十二グレイン 砂糖

右合為十二服日三服或ハ硝石ニ差ヲ加フ

○凡ソジキターリス服量一日ニ四グレインニ過ギズ

一グレインをグラムに換算すると○・〇六グラムであるから、四グレインは○・二四グラムとなる。長期の維持量としたら多過ぎるが、三日間程服むのなら良い量であろう。なお『薬品応手録』ではジギタリスの服用量は二グレインから十グレインまでとしている。ウィザリングはジギタリスの用量として大人で一回一乃至二グレインずつを一日二回、通常は一日四グレインで充分であると述べ、一般に使用されているジギタリスの量は多過ぎると警告している。

次の例は心不全にジギタリスを使っていると思われるが、この場合も一日のジギの服用量は約四グレインとなっており、シーボルトはウィザリングの原著に忠実な使い方をしていたようである。

(二四) 老人咳嗽強ク動揺スレバ氣息短促粘痰ヲ吐キ、両脛眼瞼等ニ微腫アリ、脉強數(頻脈)ノ者、然レドモ炊腫候有ル者ハ之ヲ禁ズ

チキターリス十五ケレイン 甘草膏一羹

右二味水百千八羹 煮ルコト三四沸後火ヲ下シ硝石一羹 ヒヨシヤモスハケレインヲ加ヘ毎時一七ヲ服ス

なおヘーゼルの『医学史』初版⁽³³⁾は一八四五年に出版されたものであるが、前に述べたように近世の医薬の進歩としてキナと吐根等をあげているが、ジギタリスについては言及していない。これは現代から見ると奇妙なことに思えるが、この頃は既に述べたようにジギタリスが必ずしも正しく使われていなかったために、その価値が認識されなかったのかも知れない。

ただし、一八三六年に出たフーフエランドの *Enchiridion Medicum*⁽¹⁷⁾ ではジギタリスをかなり応用している。シーボルト、フーフエランドらはジギタリスを正しく評価して使っていたと思われる。

(7) 理学療法

有効な薬物が少かった時代には理学療法は主要な治療法の位置を占めていた。ヘーゼルは近世のパラケルスス以後の温泉療法の進歩について特に一節を設けて述べている。フーフエランドも温泉及び水治療法を賞用した第一人者⁽⁴²⁾であり、*Enchiridion Medicum* 『扶氏經驗遺訓』を開いて見れば多くの疾患について温泉の飲用または浴療法についての記述がある。十九世紀はヨーロッパで温泉水治療学が盛んになった時代である。

シーボルトの「驗方録」では温泉に言及しているのはただ一箇所であるが、広い意味の理学療法については二十項程

で触れており、かなり多いといえる。おおむね水治療法に属するものであるが、例えば半身不随に関して次のような項がある。

(八七) 半身不遂

大黃一錢 吐根二十ケレン
カノコソウ二分 龍胆五分

右研和糊為丸日二十丸

又外用方

カヤフーテ油

右頻々患処ニ施ス

○又海水浴、温泉浴、脚湯

海水浴は食塩泉と同じで治療の目的で行ったのである。半身不随に対する温泉療法はわが国では昔から行われていたのはよく知られている。ここで脚湯というのがあるが、ドイツ語で Fußbad といい、脚だけ部分的に入浴させることである。これは必ずしも脚が麻痺しているのを治療するためではなく、頭に血が昇り過ぎているのを脚に誘導しようというの狙いである。『扶氏』⁽⁴³⁾の卒中の治療の項では次のように述べている。

瀉血ニ兼テ又血液ヲ他部ニ導減スルノ諸法皆拳ゲテ行ハズンバアラス、就中蒸餅母ヲ腓腸、足跗、手臂等ニ貼シ芥子ヲ加ヘタル温湯ニ浴セシム

芥子を加えれば血管拡張はさらに増強されるわけである。小森桃鳩の『蘭方枢機』⁽⁴⁴⁾でも脳卒中、脳瘀腫、頭痛等の治療の為に、瀉血とともに脚湯、芥子湯があげられている。「験方録」ではさらに神経病の次のような例もある。

(九五) 神経病、不意ニ笑ヲ発スル者

カノコソウ 海狸香 大黃 阿魏

右為丸服

○寒水ヲ以テ頭上ヲ洗フ可ナリ○脚湯

神経病に対して内服薬も用いられたが、灌水法は重要な手段であった。精神病も大体脳の鬱血が原因と考えられたので、瀉血と水治療法は主要な治療法であった。クレペリン⁽⁴⁵⁾によれば十九世紀でもこれらの治療法が様々な形で盛んに行われていた。

なお『薬品応手録』では理学療法に關しても次のようにコメントしている。

刺絡 蜚針法 針灸 按摩 発疱 芬糊 海水浴 温泉 脚湯 寒温灌水等モ共ニ治術ノ一端ニシテ欠クベカラザルノ要法ナリ

(8) 腹水穿刺

⁽⁴⁶⁾吳はシーボルトが長崎に来てから「所謂手術の中最初に行はれたるは腹水穿刺なり」と云ひ伝ふ」と述べている。「驗方録」では腹水穿刺の記録は三回ある。そのうち一例をあげる。

(二六) 又腹水施穿腹後主方

満納^{マシナ} オンス 牛胆五分 龍胆五分 ホフマン十滴 水九十二莖

右水煎

穿刺のやり方については記述がない。腹水の原因は様々であり、穿刺して排液するのはもちろん対症療法に過ぎないが、坐して死を待つよりは勝つたであろう。

ここに出ているのは穿腹後の内服薬の処方である。ホフマンというのは十八道薬剤では鎮痙剤に分類されているホフマン鎮痛液である。これは十八世紀の体系学派の元祖で名医といわれたホフマンの創案になり、アルコールとエーテルの混合液という簡単なものであるが、この薬液の生命は永い。ヨーロッパでは鎮痙鎮痛剤または興奮剤として賞用され、わが国では昭和の『内科診療の実際』⁽⁴⁷⁾にも記載されている。

腹水を次のように内服薬で治療することもあつた。薬はおおむね利尿剤である。

(七八) 治腹水

蜘蛛石ニ菱　ヂキターリスハケレイン　酒石酸液三分

右合八服ト為シ日ニ三四服

(七九) 又飲剤方

龍胆　大黃　硝石　杜松子ユニヘルホム　泥昌根カルミユス　芽根カラス

右水煎、剛鉄太陽煎十滴　牛胆五分　ヲ加ヘ法ノ如ク用ユ

(9) 手術療法

シーボルトは外科医学士の称号も持っていたわけであるが、この頃はまだ麻醉法や無菌法のなかつた時代であるからあまり目覚ましい手術はできない。前項で述べた腹水穿刺などはこの頃は手術に含められたであろう。癌の切除術については既にその項で触れた。また黴毒のゴム腫が骨にできたのを切除する症例も既に引用したが、あと一つ咽喉部にできたゴム腫のようなものを切除する例を次に紹介する。

(二四五) 黴家咽喉辺核ヲ生シ蟹腫ヲナス、大小共二三個ナリ、之ヲ截去スル、其施術ノ間ノ出血ハ水ヲ以テ含漱セシメ而シテ後方ノ含漱剤ヲ与フ即

酢水 蜜 右三味調合

内服方 硝石一味ヲ溶解シテ聽用ス

なおこの「驗方録」以外の資料に出て来るシーボルトの外科手術について少し補足しておく。大鳥⁽⁴⁸⁾によれば、長崎の通詞の吉雄権之助の家塾へシーボルトが文政十年五月に赴いて、いくつかの手術をした記録が吉雄の門人によって筆録されており、「シーボルト直伝方治療法」及び「シーボルト治療日記」という文書で残っている。大鳥はそのうちの一例、十二歳の男児の巨大な頭部腫瘍をシーボルトが切除した記録を紹介している。これは手術の術式やその後の経過まで詳しく記録されている貴重なものである。

四 ま と め

- (1) まだあまり知られていない資料『蘭方口伝（シーボルト驗方録）』を中心として、シーボルトの臨床医学の実態に検討を加えた。
- (2) まず資料に基づいて、四則之辨、二性、六法等の文章を引用して、シーボルトの臨床医学における基本的な観点と治療法の種類を示した。
- (3) 次に順序不同な「シーボルト驗方録」の条項を整理し、疾患別の見地からいくつかの例をあげて概観した。

すなわち、①悪性腫瘍に関しては鰈傷^{カシヅル}の截断の仕方と舌疽に対する処置、②婦人科に関しては子宮癌転移と帯下の症例、③徽毒に関しては骨梅毒と水銀軟膏塗擦療法、④泌尿器に関しては淋病性膝関節炎と陰囊水腫、⑤眼疾患に関しては内障瞳孔散大と角膜混濁、⑥皮膚疾患に関しては痘瘡と小児湿疹、⑦肺疾患に関しては高良齋の肺炎、⑧消化器に関しては食中毒と霍乱、⑨骨・関節疾患に関しては関節症と腐骨疽、以上の例を紹介し、他の資料も参照して若

干の検討を加えた。

(4) 次に治療法の観点から「驗方録」を見直し、同時代の資料とも比較しながら、シーボルトの臨床医学の考え方をさらに明らかにしようと努めた。

すなわち、①瀉血の肺炎、精神障害等に対する応用、②阿片の舌疔(舌癰)等に対する応用、③吐剤の痙攣、痘瘡等に対する応用、④下剤・灌腸の肺炎、腸癰等に対する応用、⑤キナ皮の舌疔等に対する応用、⑥ジギタリスの使用量と心不全に対する応用、⑦半身不随、神経病等に対する温浴、灌水浴等の理学療法、⑧腹水に対する穿刺療法と薬物療法、⑨ゴム腫等に対する外科的手術療法、以上の治療法についてシーボルトの時代的背景も視野に入れながら検討を加えた。

文献

- (1) 呉秀三『シーボルト先生、その生涯と功業』一卷、三八―四三頁、平凡社、東京、昭和四十五年。
- (2) 古賀十二郎『西洋医学伝来史』一二七頁、日新書院、東京、昭和十七年。
- (3) 中西啓『長崎のオランダ医たち』一四九―一五四頁、岩波書店、東京、一九七五年。
- (4) 黒田源次『鳴滝塾』『シーボルト研究』二三一―六〇頁、名著刊行会、東京、昭和五十四年。
- (5) 高於菟三『薬品応手録』について、『中外医事新報』一二七一号、三七八―三八四頁、昭和十四年。
- (6) シーボルト著、斉藤信訳『江戸参府紀行』一〇八一―〇九頁、平凡社、東京、昭和五十一年。
- (7) 戸塚武比古『シーボルト処方録』『日本医学雑誌』二九卷、四号、三二六―三三九頁、昭和五十八年。
- (8) 中村昭『蘭方口伝(シーボルト驗方録)』『日本医学雑誌』三六卷、三号、二七―二九四頁、平成二年。
- (9) 阿知波五郎『近代日本の医学―西欧医学受容の軌跡』二七四―二八八頁、思文閣出版、京都、一九八二年。
- (10) 宇田川玄真『増補重訂内科撰要』一卷、八一―九丁、風雲堂、江戸、文政五(一八二二)年。

- (11) 阿知波五郎「小森桃塙」京都府医師会編『京都の医学史』七〇八―七二一頁、思文閣出版、京都、昭和五十五年。
- (12) 呉秀三『シーボルト先生、その生涯と功業』三卷、一四八―一四九頁、平凡社、東京、昭和四十六年。
- (13) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』下、五七八―五九〇頁、岩波書店、東京、一九八六年。
- (14) 阿知波五郎「広瀬元恭」京都府医師会編『京都の医学史』七五二―七五四頁、思文閣出版、京都、昭和五十五年。
- (15) 石田純郎『蘭学の背景』八五―八九頁、思文閣出版、京都、一九八八年。
- (16) 土肥慶蔵『世界徽毒史』形成社、東京、昭和四十八年。
- (17) Hufeland, C. W. : *Vertrald door Hageman, H. H. : Enchiridion Medicum*. Bij H. D. Sanbergen, Amsterdam, 1838.
- (18) 緒方洪庵訳『扶氏經驗遺訓』卷二十二、三十九丁、適齋齋、大坂、安政四（一八五七）年。
- (19) 土肥慶蔵、前掲書、一六二―一八一頁。
- (20) 小森桃塙『蘭方枢機』卷一、題言、四丁、貽安齋、京都、文化十三（一八一六）年。
- (21) 呉秀三、前掲書、三卷、三三―三八頁。
- (22) Hill, J. : *The Family Herbal*. 301-302, Bungay, 1812.
- (23) Hildebrandt, G. : *Balneologie und medizinische Klimatologie*. Band 2, Balneologie, 149, Springer-Verlag, Berlin, 1985.
- (24) 大槻如電『新撰洋学年表』六七頁、柏林社書店、東京、昭和三十八年。
- (25) Hill, J. : *The Family Herbal*. 298-299, Bungay, 1812.
- (26) 古賀十二郎、前掲書、二四五頁。
- (27) 『扶氏經驗遺訓』卷七、三一―四丁。
- (28) 『扶氏經驗遺訓』卷十六、三十五―三十八丁。
- (29) 山崎佐『日本疫史及防疫史』五三〇―五四三頁、克誠堂書店、東京、昭和六年。
- (30) 呉秀三、前掲書、三卷、一二頁。
- (31) 川喜田愛郎、前掲書、下、六一七―六一八頁。

- (32) 杉田成卿訳『濟生三方』天眞樓、江戸、嘉永二（一八四九）年。
- (33) Haeser, H.: Lehrbuch der Geschichte der Medizin, Friedrich Mauke, Jena, 1845.
- (34) 『濟生三方』卷上、三一七丁。
- (35) 『扶氏經驗遺訓』卷二十四、三十一丁。
- (36) 『濟生三方』卷中、一一五丁。
- (37) 『濟生三方』卷下、六一十丁。
- (38) 『増補内科撰要』卷一、十三—十四丁。
- (39) 『扶氏經驗遺訓』卷十、五丁。
- (40) 藤井尚久「本邦疾病史」日本学士院編『明治前日本医学史』一卷、三三〇頁、日本學術振興會、東京、一九五五年。
- (41) Withering, W.: An Account of the Foxglove, and Some of its Medical Uses, & C. M. Swinney, Birmingham, 1785.
日本臨床社、東京、一九五〇年復刻。
- (42) 藤浪剛一『温泉知識』二三八—二六一頁、丸善株式会社、東京、昭和十三年。
- (43) 『扶氏經驗遺訓』卷十一、七丁。
- (44) 『蘭方枢機』卷二、一一六丁。
- (45) クレペリン著、岡不二太郎他訳『精神医学百年史』六〇—六六頁、金剛出版、東京、一九七七年。
- (46) 呉秀三、前掲書、二卷、三一七頁。
- (47) 西川義方他『内科診療の実際』四二七頁、南山堂、東京、昭和四十七年。
- (48) 大鳥蘭三郎「シーボルトと日本における西洋医学」『シーボルト研究』四九四—四九七頁、名著刊行会、東京、昭和五十四年。

（七沢リハビリテーション病院）

Clinical Medicine of P.F. von Siebold

by Akira NAKAMURA

The author elucidates some aspects of the clinical medicine of P.F. von Siebold (1796-1866) by studying a manuscript titled "Rampō-kuden, namely, dictative teaching of Dutch medicine by P.F. von Siebold", which has not been studied enough yet.

From this manuscript the author considers the descriptions about cancers, gynecological diseases, syphilitic diseases, urinary diseases, ophthalmic diseases, skin diseases, pulmonary diseases, gastrointestinal diseases and osteo-articular diseases, and thereby shows the concepts and therapeutic techniques of P.F. von Siebold regarding these diseases. (11)

To make his therapeutics more clearly understood, the author comments on blood-letting, opiates, emetics, purgatives, peruvian bark, digitalis, physiotherapy, abdominal paracentesis and surgical operations written in this manuscript.